かたりべ141

豊島区立郷土資料館・芸術文化推進グループだより

生誕一二〇周年　豊島区所蔵作品展

小熊秀雄　遊歩者のスケッチ

二〇二二年二月一日(火)～三月一三日(日)

二〇二二年二月一日から小熊秀雄展が始まります。主担当に聞いてみます。

――小熊秀雄とは、どのような作家なのですか。

一九〇一年に北海道で生まれ、一九四〇年に豊島区で没した詩人で、「池袋モンパルナス」の呼称をつけたとされています。自身では詩人といっていますけれど、詩だけではなく、童話、文芸や美術批評、漫画原案などでも活躍した人です。

一九三〇年代に池袋に来てからは、絵画制作も多く手掛けています。

――小熊が絵を描き始めたのはなぜですか。

上京前、北海道でも絵画制作をしていて、描くことに興味があったようです。一九三〇年代に池袋に住むようになってから、周りの画家たちに影響を受けて本格的に描くようになりました。特に画家の寺田政明と近しい関係にあり、小熊は絵の具を借りたりしていたそうです。一九三〇年代の初めから言論弾圧が厳しくなり小熊が得意としていたプロレタリア詩の制作発表ができなくなってきていたので、違った表現手段を試み、その中に画業が含まれているのではないかと思われるふしもあります。日々の糧を得るために絵を売るなどもしていたようです。一九三七年には池袋の喫茶店で個展をひらいており、画業にも積極的であったようです。

――所蔵品による小熊秀雄展は一一年ぶりとなります。なぜ開催に至ったのですか。

二〇二一年が小熊秀雄の生誕一二〇周年に当たる年なので、この年を記念して開催する運びになりました。一一年前に展示（註）したあと新収蔵作品も増えて、それを初めてお披露目することになります。小熊秀雄の絵画作品は豊島区の美術分野のコレクションの中核となっています。

――本展のコンセプトはなんですか。

詩人小熊秀雄の側面というよりも、小熊秀雄の画業に大きく焦点を当てたいと考えています。小熊の絵はナイーブで繊細、やさしげな、はかなげな印象があります。世間によく知られる語気の強い、

社会に対抗するような詩とは相反する作品となっていますが、絵と詩に共通するテーマとして街の描写があります。詩で表される街は、小熊の悲喜こもごもの心情を重ねられる装置として機能しています。一方、小熊の絵の街の描写は、カフェや街路、ランドマークになる建物、市中に生きる人々が画題として出てきます。隅々を歩きながらあちこちに目配せをし描いていたということが、たくさんのスケッチや水彩画からうかがわれます。小熊のしごとにおいて詩作に画業が加わったとき、それがフラヌール（遊歩者）の視線に似ているので、そこからインスピレーションを得て展示を考えてみようと思いました。

《負けるなカルメン》1930年代　インク、紙　豊島区蔵　＊新収蔵作品

――フラヌール・遊歩者について説明してください。

フラヌールとは直訳では街をそぞろ歩く人という意味のフランス語の名詞（flâneur）です。一九世紀、フランス・パリを中心に現れた紳士像で、当時のフランスの文壇や絵画の中に多く登場します。ぶらぶらとあてもなく街を歩きながら群衆や街並みを観察したり、カフェに長時間滞在してみたり、基本的には街の中でもひとりもの思いにふける、そうした振る舞いを見せる男性はフラヌールとされました。ご参考にボードレールの『パリの憂鬱』、ベンヤミン『パサージュ論』といった本をご紹介します。ボードレールは萩原朔太郎など日本の文学者たちにも影響があったようです。

フラヌールの背景をご存知なかったとしても、日本語では遊び歩く者（人物）、と書きますから、なにやら楽し気な様相も伝わるのではないでしょうか。

――会場には動線を明示せず、あまり制約をつけていないようです、それでもこのように並べたわけを教えてください。

展示の構成としては、小熊がエッセイで語っていた、日常的な街歩きをなぞるようにしています。入口付近に配した、小熊の住まいのある池袋の西側の長崎アトリエ村あたりをスタートして、立教大学を通って、池袋や街中、繁華街をめぐるイメージで構成しています。池袋まで着いたそのあとは、自由に街を歩いていただくイメージで作っているので、固定の動線はありません。例えばカフェのゾーン、川岸ゾーンなどまとまったテーマで展示してはありますが、フラヌール小熊の気持ちになって自由に足の向くまま展示をご覧いただければと思います。

会場配布のリストで、作品の情報はまとめてご提示しています。テーマごとに並べていますので、作品名を参照していただければと思います。リストを見ながら、作品の内容、テーマについて追えるようにしてあります。

――出品作品の中から一点、紹介してください。

《小路》、ですね。今回の展示テーマにおける街を歩く小熊の視線を良く表している作品だと思っています。家が並ぶ狭い小径を進みながら周りの風景、行きかう人々の姿が視界に映る構図です。

――ぴったりの文章もありましたね。

『小熊秀雄全集』の四巻に収録されているエッセイがあります。「画家・詩人・娘達」という未発表原稿です。小熊がなぜ街を描くのか、その理由を綴っており、展示のある種の核となっていると言っていいでしょう。展覧会場でもなんらかご覧いただけたらと思っています。

《小路》1930年代　インク、紙　豊島区蔵

註：小熊秀雄展①は二〇〇九年三月、②が二〇一〇年三月に、ともに熊谷守一美術館三階ギャラリーで開催。

●関連事業：

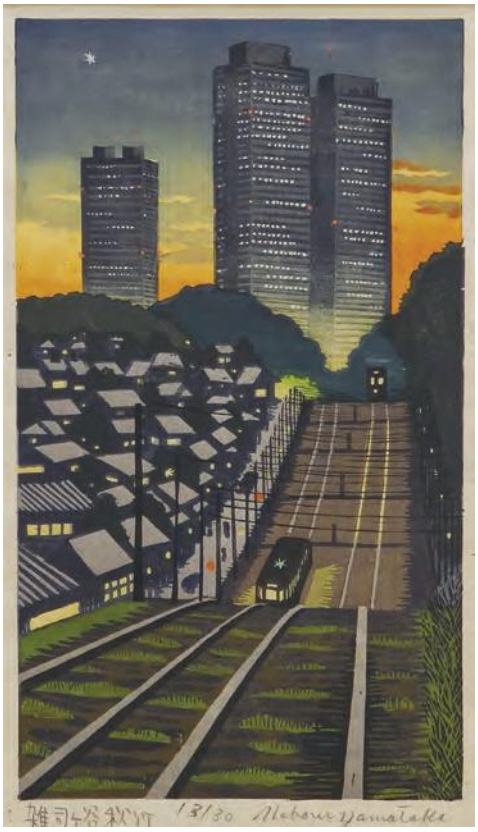
ギャラリートーク：二月二六日（土）
午後一時三〇分～（二〇分程度）

はんこペタペタ：
二月一三日（日）午後二時～四時、
三月一三日（日）午前一〇時～一二時
いずれも事前申し込み不要。当日、郷土資料館にお越しください。
こども向け鑑賞ワークシートも配布します。

（美術　堀口　麗、小林未央子（聞き手）、二〇二一年一一月二四日現在）

文学・マンガ資料紹介

山高登（やまたかのぼる）《雑司ヶ谷秋灯》～版木に刻む都電の風景（2）～



山高登《雑司ヶ谷秋灯》 1975年
木版、紙　　35×20cm
豊島区立郷土資料館所蔵

『かたりべ』138号でご紹介した山高登の版画作品には、都電荒川線の「都電雑司ヶ谷」停留場付近の踏切から、新宿方面を描いた《雑司ヶ谷秋灯》という作品があります。

山高は、この作品が制作された一九七五年頃には、新宿には「まだ超高層ビルが3棟ほどしか建っていなかった」といい、「ビルを強調したせいかニューヨークの風景のようにも見える」と書いています。新宿には、一九七一年に京王プラザホテル（四七階）、一九七四年に新宿住友ビルディング（五二階）、新宿三井ビルディング（五五階）が建設されているので、おそらくこの三つの超高層ビルが見えていたのではないでしょうか。

2021年10月著者撮影

山高は東京中のまちを歩いて気に入った風景を写真に撮り、下絵を描いてから版木に彫って、摺（す）っていました。

絵のモデルになったと思われる場所から写真を撮影してみると、いかにビルや線路の起伏、周りの家々が強調されているかがわかります。

「普通写生をしている時私は電線など殆（ほとん）ど書き入れたことはない。私は電柱やガードレール等不必要と思えばどんどん取り除いてしまう。そんなものを取り除いても絵からその路次（ろじ）の個性や風土感は失われるものではないと思っているからである。」

いつの間にか、暗くなるのが早くなったと気づく秋の夕暮れ時、都電が走る線路の脇には今も家々が立ち並び、日暮れとともにぽつりぽつりと灯りが点く様子が印象的でした。山高の版画には、その土地の「風土感」とともに人々の暮らしの気配が感じられます。

※引用はすべて、山高登『東京昭和百景　山高登　木版画集』（シーズ・プランニング、二〇一四年）より

（文学・マンガ　西方ゆり恵）

文学・マンガ分野　収蔵資料あれこれ ―版画×池袋・雑司が谷編―

会　　期：2022年2月1日（火）～3月13日（日）
会　　場：豊島区立郷土資料館　常設展示室内
開館時間：9時～16時30分　　入館無料
休 館 日：月曜、第三日曜、祝日（2月7、11、14、20、21、23、28日、3月7日）

※【ご来場に際してのお願い】新型コロナウィルス感染症拡大防止のため、マスク着用、手指の消毒、検温などのご協力をお願いしています。社会状況等により、休館や事業を中止・変更する場合がありますので、事前に郷土資料館ホームページをご確認ください。

今回ご紹介した作品に加え、山高登の区内を描いた版画作品や版木、区ゆかりの児童文学者・坪田譲治（つぼたじょうじ）が主宰した雑誌『びわの実学校』の表紙原画なども展示いたします。

セピア色の記憶

第37回　池袋駅西口の変貌とまちづくり

左に示した二枚の写真は、ほぼ同じ地点から撮影した一九六三年一一月（高木進一氏撮影）と現在（二〇二一年一二月撮影）の池袋西口駅前の様子です。地図に示した＊印は撮影地点を、↓印は撮影方向を示しています。

一九四五（昭和二〇）年八月の終戦から数年間、大都市のターミナル駅周辺等を中心に、一般の商店とともに、長屋式のマーケットや、地面にゴザを敷いてヤミ価格で商売を行ういわゆる「ヤミ市」が存在しました。極度の生活必需品不足のなか、「ヤミ市」で入手した物資によりなんとか生き延びることができた都市生活者が、少なからずいたはずです。

池袋駅の周辺に展開していた「ヤミ市」は、東口は一九五二年頃には撤去され、並行して駅舎および駅前整備が進みます。一方の西口は東口に遅れること約一〇年、一九六二年末頃までに撤去。現在に引き継ぐ池袋駅西口周辺の原型が固まりました。上の写真はちょうどそのころに撮影されたものです。現状と比べて建物の高さが低く、またタクシー車両のクラシック性が目を惹きます。

さて、池袋駅周辺地域の変貌や賑わいを考える際、駅の東口側と西口側両方に「民衆駅（みんしゅうえき）」として建てられた駅ビルがあり、その駅ビルを拠点にして人の流れが形成されていったという特徴がみられます。

「民衆駅」とは、かつての国鉄駅が民間資本を取り入れて建てた駅ビルのことを指します。この民衆駅構想承認の第一号が愛知県豊橋駅で、第二号が池袋駅西口、第一七号が池袋駅東口でした。すなわち、一九五〇年に完成した西口駅ビルである東横百貨店（現在東武百貨店の一部）、一九五七年に完成した東口駅ビルである東京丸物（まるぶつ）百貨店（現在池袋パルコ）が、この「民衆駅」に該当します。

時代はくだり二〇一九（令和元）年一一月、豊島区による「グローバルリング」の整備とともに池袋西口公園がリニューアルオープン。その後、二〇二一年八月、長い間池袋駅周辺のランドマークのひとつでもあった池袋マルイが閉店するなど、池袋駅西口の姿が変わりつつあります。この先しばらくは、西口周辺の景観変化とまちづくり動向から目が離せません。

（郷土　秋山伸一）

1962（昭和37）年ごろの池袋駅西口（駅側から撮影したもの）
火の見櫓（消防署）右側の空き地部分が後年池袋マルイとなる

豊島をさぐる〈25〉

90年前の高田町の三大事業　ビフォー&アフター

今年は、北豊島郡の旧四町が統合して、豊島区が誕生して九〇年を迎えます［昭和七（一九三二）年一〇月一日区制施行］。

その一つ、高田町が高田町政の業績と解体当時の町の姿を後世に遺すため、昭和七年九月に作成した写真帖がありました（鏑木孝久氏寄贈。本誌104号参照）。

区南部に位置する高田町は、大正期以降、鉄道網の整備と第一次世界大戦を契機とした神田川沿岸の工場の進出及び住宅の増加により、人口が急増し、保健衛生上の問題から河川改修と下水道の整備が急務の課題となっていました。また鉄道に比べて、町を南北に縦断する幹線道路（環状線）をはじめ、町内の道路整備が遅れており、懸案課題となっていました。

本写真帖には、写真家南谷晴恍の撮影による計八〇枚の鮮明な写真が納められていますが、その多くは、海老澤了之介町長が約三年間の町政時代に重点政策として取り組んだ河川改修、下水道工事、小学校の整備、防火機関の強化、根津山開発に関する写真で構成されています。

ここでは、九〇年前の高田町の変貌がよくわかる三大事業を紹介します。

■神田川の改修工事

昭和五年一二月に起工式が挙行された。

改修前の神田川と面影橋　改修工事は、これより下流に架かる豊橋の上流から着工された。

改修工事が完成した神田川　上流側から豊橋を望む。左岸に武蔵屋染工場と干し場がみえる。

■鶴巻川（弦巻川）の暗渠工事

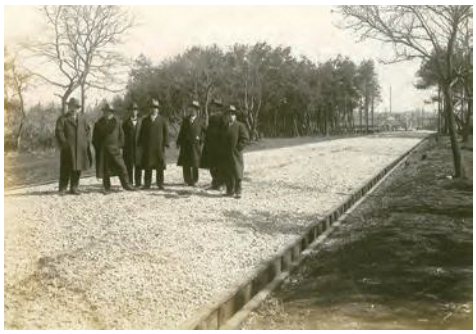
昭和六年六月に下水道工事が着手された。

暗渠前の鶴巻川　宝城寺と清立院を望む。川には生活排水が流れ落ち、時折洪水被害もあった。

暗渠後の鶴巻道路　右が大鳥神社、奥が宝城寺と清立院。中央を王子電車軌道が横断する。

■根津山の開発

昭和七年下水道工事と共に開発が始まった。



根津山道路を視察する根津嘉一郎と町理事者。池袋駅東側に広がる根津山（22,200坪の林野）を縦断して字水久保に通じる道路と、林野の周囲を通る道路が完成した。

高田町では、昭和七年八月の東京市併合特別委員会で、これらの三事業を記念して、①神田川改修記念石、②下水道築造記念石、③根津山開発記念石の建設を議決しました。②は現在、「鶴巻川暗渠記念碑」として、大鳥神社境内に遺されていますが、①と③の所在は不明です。

※研究紀要『生活と文化』第22号参照。

（郷土　横山恵美）

移転作業中

配置設計・梱包・運搬

旧第十中学校・旧高松第一保育園等での生活資料の棚卸作業（『かたりべ』一三九号「移転準備中　飯能市へ新倉庫」にて報告）が完了して以降、資料リストの見直し等を行ないながら、梱包作業に取り掛かりました。また、一〇月からは梱包した資料の運搬を開始し、新しく建設した倉庫へ資料を移し始めています。

この移転事業をどのように行なっているか、具体的に紹介します。

棚の配置設計

新しい倉庫で効率的に資料を収納できるよう、あらかじめ棚の配置を設計します。今回の移転では、資料を散逸させない工夫としてできるだけ元の収蔵状態を新倉庫で再現する方針に決めました。つまり、原則として収蔵場所（部屋＞棚＞棚板）ごとに資料を平行移動させます。まずは運搬対象の資料が収まっている各棚板の面積と高さ、それからスノコの上に載せている資料の大きさを測り、行先の収蔵スペースに落とし込んでいきます。棚の配置は、資料を持った職員が安全に行き来でき、掃除ができるようにスペースを確保します。また、空調や除湿器の風を遮らずに、空気が収蔵室全体を循環するようにします。湿った空気が停滞することによるカビの発生を防ぐためです。ほかにも、設備の故障や災害があっても資料を損なうことがないよう、ドレン（排水）管が資料の上を通らない設計にするなど、使い勝手を考えると同時に最大限のリスク回避をします。

梱包済みの資料（一部）
〔2021年11月24日撮影〕

梱包のデザイン

資料の強度や大きさは千差万別で、梱包の方法は個々に検討が必要になります。棚への収納などを含む運搬業務は専門業者に委託していますが、対象がいずれも〝取扱注意〟の資料であることから、大型資料や重量物資料を除く大部分の梱包作業はこれまで棚卸作業を行なってきた調査員と学芸スタッフとで行ないました。

梱包には、ラッピングなど見栄えをよくするためのものもありますが、ここでの目的は運搬時の衝撃に備えることが中心になります。また、開梱までに期間を要することから湿気がこもらないように、ある程度保存環境も意識しなければなりません。さらに、梱包した資料は一目では内容物の状態が分からなくなってしまうため、運搬時や開梱時における資料の扱い方を伝えるようにします。このことは複数人で作業する上では特に重要です。注意書きやあらかじめ扱い方に関する決めごとをするほか、取手をつくる、脆弱（ぜいじゃく）な部分に触れられないようにする、内容物が見えるようにするといった梱包上の工夫によっても伝達します。

運搬とその後

運搬はトラック輸送によって行ない、それぞれの資料の行き先は、引越しラベルに記入することで指定しました。新倉庫で資料を収納する際には、棚板（約一五〇〇枚）の高さ調整を行ないながら、梱包資材に資料の一部が紛れていないかといったことにも注意します。

運搬終了後は、開梱して資料に瑕疵（かし）がないかを確認し、収蔵場所の記録を更新する作業などが控えています。

（郷土　鄧　君龍）

編集後記

「かたりべ」141号をお届けします。

当館では、昨年9月27日～1月31日まで、飯能倉庫への資料移転のため休館しました。

この間、皆様にはご迷惑をおかけしましたが、2月1日の再開にあわせて、美術所蔵作品展「生誕120周年小熊秀雄―遊歩者のスケッチ」と、「文学・マンガ分野収蔵資料あれこれ―版画×池袋・雑司が谷編―」を同時開催いたします。区ゆかりの二人の作家が描いた作品を一堂に紹介した見ごたえのある展示です。

また今年は、昭和7（1932）年10月1日に豊島区が誕生して90年を迎えます。当館では、区制90周年を記念した特別展やイベントを企画中です。こちらもぜひご期待ください。

（郷土　横山恵美）

かたりべ
No.141
・
2022年1月28日
・
豊島区立郷土資料館
・
東京都豊島区西池袋2-37-4
としま産業振興プラザ7階
・
電話 03-3980-2351
URL
http://www.city.toshima.lg.jp/bunka/bunka/shiryokan/index.html

資料寄贈受入れの一時休止のおしらせ

資料移転及び準備作業のため
資料寄贈の受け入れを
2022年春頃まで、
一時休止いたします。

11月1日は としま文化の日 Toshima City Culture Day
SDGs未来都市としま
TOSHIMA International City of Arts & Culture
SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS
豊島区は持続可能な開発目標（SDGs）を支援しています。